

『古代アメリカ』4, 2001, pp. 77-94

<研究ノート>

副葬品・埋納品としてのメタテとマノ

— マヤ地域の副葬品・キャッシュ分析から —

多々良 穰

(東北学院榴ヶ岡高等学校)

【キーワード】

メタテ、マノ、副葬品、キャッシュ、マヤ地域
metate, mano, grave goods, cache, Maya area

1. はじめに

古代メソアメリカ社会において、トウモロコシ栽培は重要な生業の一つであり、その調理具がメタテとマノであった。メタテとマノは、しばしば日常生活の場である住居址もしくはごみ捨て場から出土しており、これまでも多くの資料が報告されている。しかし「製粉具」としての用途以外にも、副葬品や埋納品などの「儀式具」として利用する例がある。本稿では、マヤ地域における埋葬とキャッシュの事例を提示して、メタテやマノが「儀式具」に使われた理由についてその可能性を指摘し、今後の問題点を整理する。

今回取りあげる資料の対象地域はマヤ地域で、北はマヤ北部低地のマヤパンから南はマヤ南部低地のコパンに及ぶ範囲である。太平洋岸地域にはメタテやマノの副葬例・埋納例が確認できなかったため、マヤ高地・マヤ南部低地・マヤ中部低地・マヤ北部低地における19ヶ所の開地遺跡(図1)で出土したメタテとマノの資料を見ていく。ただし、筆者が実見できた資料はごくわずかであり、多くの遺物の特徴や属性については各遺跡の発掘報告書の記述に基づいている二次資料である。

2. メタテとマノの副葬例と埋納例

2-1. 分析に用いる用語・基準

本稿では、ウェルシュ分類 [Welsh 1988: 16-18]などを参考にして、大型墓室 (Tomb)・石室墓 (Crypt)・石列墓 (Cist)・墓坑 (Pit)・単純埋葬 (Simple) という5種類の墓の型式を用いる。それぞれの特徴を簡潔にまとめると、大型墓室は精巧な作りの石を並べた部屋もしくは岩盤を切り出した大規模な部屋を持つ墓で、頂石で覆われている。墓室は、人が中腰で立てるほどの高さである。石室墓はほぼ完璧に石が積み上げられているか、墓の外郭線に沿って石が並べられてあり、頂石で

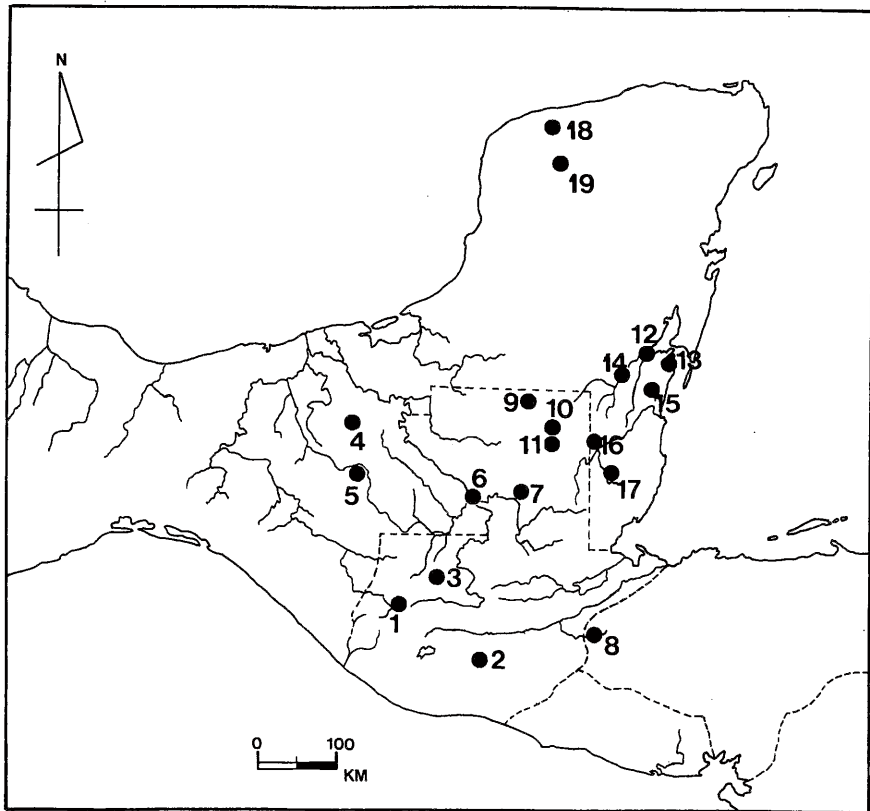


図1 本稿で扱う遺跡

マヤ高地	1	サクレウ	2	カミナルフユ	3	ネバフ
マヤ南部低地	4	パレンケ	5	トニナー	6	アルタル＝デ＝サクリフィシオス
	7	セイバル	8	コパン		
マヤ中部低地	9	エル＝ミラドール	10	ワシャクトウン	11	ティカル
	12	サンタ＝リタ＝コロサル	13	セロス	14	クエリヨ
	15	アルトゥン＝ハ	16	ベイキング＝ポット	17	マウンテン＝カウ
マヤ北部低地	18	ジビルチャルトウン	19	マヤパン		

覆われている。石列墓は墓の外郭線に沿って石が並べてあり、その石が側壁や床などを形成しているが、頂石は認められない。墓坑は、ピットや一部分に石を配列して墓域が区別されている。そして単純埋葬は、何の仕切りや構築物も設けずに、単に地面を掘って埋葬している。

次にメタテの形態については、拙稿による分類〔多々良 1994〕を参考に、次のように分類する(図2)。

BN...いわゆる亀の甲羅形で、マヤ地域においてもっとも一般的なメタテである。

BN-D...亀の甲羅形のうち、使用面がかなり掘り込まれ、箱形を呈するものである。

BN-L...亀の甲羅形に足のついたメタテである。

SL...板状のメタテで、使用面はBNほど窪んでいない。拙稿のF形〔Ibid.〕も含む。

SL-L...板状のメタテに足のついたものである。拙稿のFL形〔Ibid.〕を含める。

SL-LS...SL-L形だが、足の長さが違うために使用面が傾いている。拙稿のFL-S形〔Ibid.〕を含める。

EF...装飾がなされている、いわゆる形象メタテであり、すべて足がついている。

なお、地域による編年差は当然あるが、本稿では、便宜上おおよそ次のような時期幅を目安とする¹⁾。

先古典期：前期(前1600～1000年)・中期(前1000～300年)・後期(前300～後250年)

古典期：前期(250年～600年)・後期(600年～900年)

後古典期：前期(900年～1200年)・後期(1200年～1500年)

2-2. 資料

メタテやマノの副葬例や埋納例が確認できた19遺跡(図1)について、資料を列挙する。墓資料については、表1にまとめたので参照されたい。

<サクレウ>〔Woodbury and Trik 1953〕

墓は全体で108基が報告され、うち5基の墓にメタテやマノが副葬されていた。築造時期は、古典期後期が1基、後古典期前期が1基、後古典期後期が3基である。

完形のSL-LSメタテとマノが3セット...建造物1の大型墓室、古典期後期。

BN-Lメタテ片が1点...墓9-1(石列墓)、後古典期前期。

SL-LSメタテ片とマノ片が各1点...墓11-1(石室墓)、後古典期前期～後期。

完形のEFメタテとマノが2セット...墓12-1(石室墓)、後古典期後期。

完形のEFメタテとマノが1セット...墓37-3(石室墓)、後古典期後期。

キャッシュは20基が報告され、うち1基のみにメタテとマノが埋納されていた。

完形のSL-LSメタテとマノが1セット...Ca.12-1(建造物下)、後古典期後期。

<カミナルフユ>〔Kidder et al. 1946; 大井・中森 1995〕

この遺跡では、マウンドA・Bのある区域とモンゴイ地区から、墓や埋葬資料があわせて30基検出された。

マウンドA・Bからは25基の墓が検出され、うち10基からメタテやマノが出土した。

完形のSL-LSメタテ1点...A-I墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...A-II墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...A-IV墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...A-V墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...A-VI墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが2セット...B-I墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...B-II墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...B-III墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...B-IV墓（大型墓室）、先古典期中期。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...B-V墓（石列墓）、先古典期中期。

次に、モンゴイ地区では埋葬4と埋葬5が検出されたが、いずれも二次埋葬で保存状態が悪い。墓ではなく供物として報告されているため [大井・中森 1995: 245, 250]、本稿では埋納遺構として扱う。

BNかSL-Lメタテ片3点、マノ片3点...埋葬4（供物用ピット）、先古典期後期。

BNかSL-Lメタテ片2点、マノ片3点...埋葬5（供物用ピット）、先古典期中期。

<ネバフ> [Smith and Kidder 1951]

マウンド1・2から15基の墓が見つかったが、うち1基からのみマノが検出された。

完形のマノが1点...5号墓（石室墓）、古典期後期。

<パレンケ> [Blom 1925-27; Ruz 1962]

32基の墓のうち2基の墓に、メタテとマノの副葬例が認められた。

マノ片1点...A1墓（石室墓）：二次埋葬、古典期後期。

メタテ1点（形態不明）...S5墓（大型墓室）：攪乱、古典期後期。

<トニナー> [Becquelin and Baudez 1979]

21基の墓のうち1基のみに、メタテとマノの副葬例が認められた。

完形のSL-Lメタテとマノが1セット...V-2墓（石列墓）、古典期後期。

<アルタル=デ=サクリフィシオス（以下アルタル）> [A.L.Smith 1972; Willey 1972]

128基もの墓が見つかったが、メタテが副葬されていたのはわずか1基であった。

完形のBNメタテが1点...25号墓（石列墓）、古典期前期末～後期初頭。

<セイバル> [Tourtellot 1990; Willey 1978]

51基の墓のうち1基のみに、マノの副葬例が認められた。

マノ片1点...5号墓（石列墓）、先古典期後期。

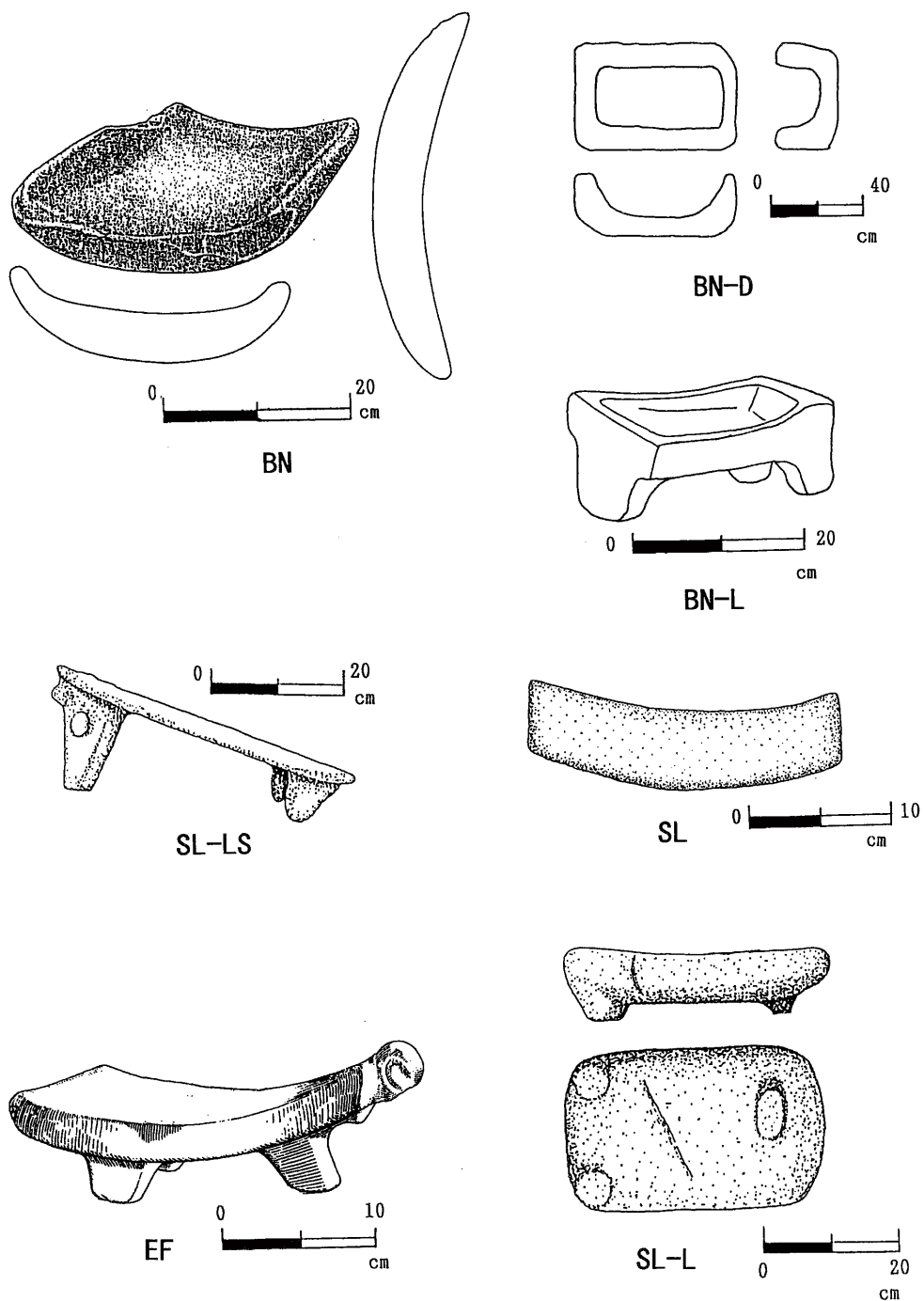


図2 メタテの形態分類

[多々良 1994 図2 を一部改変]

<コパン> [Longyear 1952]

55基の墓のうち1基のみに、メタテの副葬例が認められた。

メタテ1点(形態不明)...T7墓(石室墓)、後古典期前期。

<エル＝ミラドル> [Copeland 1989; Howell 1989]

発掘が進んでいないが、現在のところ3基の墓のうち1基にメタテの副葬例がある。

BNメタテ片1点...3号墓(単純埋葬)、古典期後期。

<ワシャクトウン> [Ricketson and Ricketson 1937]

106基の墓が見つかったが、メタテの副葬例はわずか1基であった。

BNメタテ片1点...E6墓(石列墓:頭部分のみ)、古典期前期。

<ティカル> [Coe 1990; Haviland 1985]

発掘は進んでいても、多くの未報告資料が山積している。現在報告書で確認できる範囲では、105基のうち3基の墓から製粉具が見つかった。

BNメタテの破片1点...22号墓(大型墓室)、古典期前期。原位置か少々疑問。

完形のメタテとマノが1セット(形態不明)...48号墓(大型墓室)、古典期前期。

SL-L?メタテ片が1点...16号墓(墓坑)、古典期後期。

また、問題ある遺構(PD) 50²⁾という項目が報告書にあり、本稿ではこれらを埋納遺構として扱う。7ヶ所報告されている。

メタテとマノが1セット(形態不明)...PD50(二次埋葬?)、古典期前期。

メタテとマノが1セット(形態不明)...PD74(火葬跡?)、古典期前期。

マノ片1点...PD14(建造物下):盗掘で攪乱?、古典期前期～後期。

完形のメタテ1点、メタテ片2点(形態不明)...PD22(建造物下)、古典期後期。

完形のメタテとマノが2セット...PD46(建造物下)、古典期後期。

完形のマノ3本...PD47(建造物下)、古典期後期。

完形のマノ1本...PD211(建造物外)、古典期後期。

<サンタ＝リタ＝コロサル(以下サンタ＝リタ)> [Jaeger 1988]

全体の墓資料数は不明であるが、2基の墓からメタテやマノが見つかった。

完形のBN-Dメタテが1点...墓の名称・型式不明、後古典期前期～後期。

マノが1点...墓の名称・型式不明、後古典期後期。

<セロス> [Garber 1989]

副葬品やキャッシュの報告はあるが、墓の形態・コンテクスト、キャッシュの出土状況は不明である。また、儀式跡と報告されてあるため一応列挙するが、その根拠は明確な考古学的証拠による

ものとは言えない [Garbarによる私信 2000]。

マノ片 1点...墓 (Feature 1A)、先古典期後期

マノ片 1点...墓 (Feature 1A)、先古典期後期

マノ片 1点...終末儀礼跡 (Feature 5C)、先古典期後期

マノ片 1点...建築奉納儀式跡 (壁の中: Feature 2A)、先古典期後期

BNメタテ片 1点...墓 (Feature 1A)、先古典期後期

BNメタテ片 1点...キャッシュ (Feature 11B)、後古典期後期

<クエリョ> [Hammond 1991]

142基の墓が発見されたが、うち1基のみにメタテの副葬例が認められた。

BNメタテ片が2点...23号墓 (単純埋葬)、先古典期後期。

<アルトゥン=ハ> [Pendergast 1982, 1990]

255基もの墓が発見され、うち2基にメタテやマノが含まれていた。

マノ 1点 (破片?) ... 4号墓 (石列墓)、古典期後期。

BNメタテ片 1点...25号墓 (墓坑: 二次埋葬の骨壺2個)、古典期後期。

また、メタテやマノが含まれているキャッシュが2ヶ所見つかった。

BNメタテの破片が1点...キャッシュD-2/1 (建造物放棄後)、後古典期。

マノ片が1点...キャッシュE-44/3 (建造物下、祭壇に対するもの)、古典期後期。

<ベイキング=ポット> [Ricketson 1931; Willey et al. 1965]

27基の墓のうち、1基のみにメタテとマノが認められた。

完形のBNメタテとマノが1セット...R1墓 (単純埋葬)、後古典期。

<マウンテン=カウ> [Thompson 1931]

18基の墓のうち、1基のみにメタテが副葬されていた。

メタテ 1点 (形態不明) ... 7号墓 (石室墓)、古典期後期。

<ジビルチャルトウン> [Andrews and Andrews 1980]

116基の墓のうち、メタテやマノが副葬されていたのは2例のみであった。

完形のBN-Dメタテが2点...57-1 (石室墓)、古典期後期~後古典期前期。

マノ 1点...38-sub.7 (単純埋葬: 二次埋葬)、古典期後期。

<マヤパン> [Proskouriakoff 1962; Smith 1962]

「納骨室 (Burial Vault)³⁾」も含めて58基の墓が報告され、うち7基の墓からメタテやマノが副葬品として確認された。

完形のマノ 1点...2号墓 (石列墓)、後古典期後期。

完形のBNメタテとマノが1セット...14号墓（石列墓）、後古典期後期。

マノ片が1点...16号墓（石列墓）、後古典期後期。

完形のBNメタテ1点...39号墓（石室墓）、後古典期後期。

完形のマノ1点...5号納骨室（石列墓）、後古典期後期。

BN-DとBNメタテの破片が各1点...15号納骨室（石室墓）、後古典期後期。

完形のBNメタテ1点とマノ4点...18号納骨室（石列墓）、後古典期後期。

3. メタテとマノの副葬品の分布

メタテやマノが副葬品や埋納品として検出されていない遺跡は、筆者が確認できたものだけでも60遺跡以上あり、これらが副葬品や埋納品の主流ではない。上記のように、副葬品は19遺跡46例、キャッシュなどの埋納品は5遺跡13例が確認できた。ここでは、特に副葬品の分布に関して時期別に整理し、地理的な分布についても触れながら考察したい。

まず先古典期において、メタテやマノが副葬品として出土した墓は、カミナルフユで10基、セイバルで1基、セロスで3基、クエリヨで1基の計15基である。カミナルフユのものはすべて先古典期中期、その他はすべて同後期に属する。マヤ高地に位置するカミナルフユの墓資料は特筆すべきで、大型墓室の全10基のうち9基に製粉具の副葬品が認められ、しかもすべて完形でセットである。このような傾向は同時期の他の遺跡には見られない。

次に古典期において、製粉具が副葬品として検出された墓は15基である。古典期前期に属するのは、アルタルで1基（後期初頭に属する可能性あり）、ワシャクトゥンで1基、ティカルで2基の計4基である。また、同後期に属するのは、サクレウで1基、ネバフで1基、パレンケで2基、トニナーで1基、エル＝ミラドールで1基、ティカルで1基、アルトゥン＝ハで2基、マウンテン＝カウで1基、ジビルチャルトゥンで1基の計11基である。全体の時期を通じて、古典期ではもっとも多い11遺跡で製粉具の副葬品が認められるが、これはこの時期に製粉具の副葬が盛んに行われていたことを示すものではないと思われる。つまり、マヤ地域全体では古典期に属する遺跡が多く発見されているが、発掘調査自体がマヤ低地の古典期に属する遺跡をターゲットにしてきた傾向がある。そのため、資料そのものも古典期に属するものが多い。また、上のデータからは、いずれの遺跡も1ないし2基の墓にしか認められていないことがわかり、やはり盛んに製粉具が副葬されていたということにはならない。

最後に後古典期において、製粉具が副葬品として出土したのは、サクレウで4基、コパンで1基、サンタ＝リタで2基、ベイキング＝ポットで1基、マヤパンで7基の計15基である。そのうち、後古典期前期に明らかに比定できるものは、サクレウの1基、コパンの1基のみで、残りは同後期に比定できるか、明確には前期・後期を区別できない資料である。後古典期は、マヤ文明全体として見た場合でも、栄えた都市がほぼマヤ高地とマヤ北部低地に限定され、製粉具の副葬例の分布もその傾向とほぼ相違ない。だが着目すべきことは、サクレウとマヤパンにおける製粉具の副葬例に完形品が多いことである。後古典期に儀礼に使われていたバラカンチェ洞窟では、大量のメタテやマノのミニチュアセットが発見されており [Andrews 1970, 多々良 2000]、そのことも含めて、後古典期は鍵となる時期と言える。

以上のように、先古典期のカミナルフユ、後古典期のサクレウとマヤパンでは、製粉具の副葬例が目立ち、しかも完形品が比較的多く認められる。しかも、前者2遺跡からはキャッシュも検出されている。製粉具の副葬例に限らず、マヤ高地において古典期に占有された遺跡があまり報告されていないのが残念だが、この2遺跡が単に同じマヤ高地に存在しただけなのか、それとも製粉具の副葬例がこの地域の特徴的な文化要素なのか、今後マヤ高地を注目していきたい。

また、古典期のティカルも注目したい遺跡である。ティカルでは、古典期前期・後期合わせて3基の墓から製粉具が確認されており、製粉具が含まれる埋納遺構も、前期に3基（うち1基は後期に属する可能性あり）、後期に4基報告されている。それぞれの時期に最盛を誇ったマヤ文明都市、すなわち先古典期のマヤ高地・カミナルフユ、古典期のマヤ中部低地・ティカル、そして後古典期のマヤ北部低地・マヤパンには、比較的まとまった数の製粉具の副葬・埋納例が見られる。このような大都市と製粉具の副葬例との関係も、非常に興味深い。

4. メタテの形態から見た副葬された製粉具の意味

まず、完形と破片について考えたい。完形の場合、メタテのみが出土している例は、アルタル、サンタ＝リタ、ジビルチャルトウン、マヤパンの各1点ずつである。また、マノのみが出土しているのは、ネバフ、マヤパンの2点の計3点だけである。つまり、完形で製粉具が副葬された場合、セットで納められた場合が多いことがわかる（表1）。また、破片で製粉具が副葬されている例は、一遺跡でせいぜい1点か2点しか認められない。要するに、破片の状態では製粉具が大量に副葬されているのが発見された遺跡は、少なくとも現時点では知られていない。なお前章でも述べたとおり、完形のメタテとマノがセットで副葬された例が目立つのは、サクレウ、カミナルフユの2遺跡である。マヤパンでもセットでの副葬が報告されているが、ここでは単独で完形のマノが副葬されている例が同数認められ、上の2遺跡とは一線を画する必要がある。一方、それ以外の遺跡では、破片でメタテやマノが副葬された例が多いが、完形と破片とではその副葬の目的が異なっていたと考えられよう。我々が死者とともに品物を墓に納める場合、通常壊れていないものを入れることが多い。しかし、破片を入れたということは、破片でなければいけなかった何らかの理由があったはずである。では、なぜ破片を副葬したのだろうか。

報告書には、メタテやマノの使用痕について触れていないものもあるため、100%断定はできないが、破片で副葬された製粉具の多くは使用頻度が高かったことが分かっている。それらの破片は、使用回数が多くなってその結果破損した可能性がある。その場合、被葬者本人が愛着を持って製粉具を使用していたため、それを副葬してやったことは十分考えられる。マヤ高地のマシモンやサンシモンの儀式では、わざわざ石器の破片や河原石を拾い集めて祭壇に供物として供えるという民族例があるが〔桜井 1993〕、古代マヤ人にもこのような状況があてはめられるとすれば、壊れた石器だからこそ儀礼的価値が高かったと言えないだろうか。一方、意図的に製粉具を破壊して、それを副葬したと考えることもできる。その理由として、古代マヤ人は建造物などの利用が終了したり、一定の期間が完了した場合に物質を意図的に破壊する儀礼が知られている。これは新たな出発を意味したり、生活を司る神を意識したものと考えられ、一般に終末儀礼と呼ばれるものである。古代マヤ人が来世を重要なものとして捉えていたという精神世界を持っていたことは、これまで研究されてきたことであるが、死者が新しい出発をするにあたり、製粉具をわざわざ破壊して副葬した可能性はある。

表1 墓と副葬されたメタテとマノとの関係

遺跡名	墓番号	墓の型式	被葬者数	対象の被葬者	メタテ	状態	マノの有無	時期
サクレウ	建造物1墓室	大型墓室	7	若い成年女性	SL-LS	完形	セット	LC
				乳児?	SL-LS	完形	セット	
				幼児?	SL-LS	完形	セット	
	墓9-1	石列墓	7	特定できず	BN-L	破片	無	EPOC
	墓11-1	石室墓	13	特定できず	SL-LS	破片	有、破片	POC
	墓12-1	石室墓	3	成年女性	EF	完形	セット	LPOC
成年女性				EF	完形	セット		
墓37-3	石室墓	2	老人男性と若成年女性	EF	完形	セット	LPOC	
カミナルフユ	A-I墓	大型墓室	9	性別不明の子供	SL-LS	完形	無	MPRC
	A-II墓	大型墓室	4	特定できず	SL-L	完形	セット	MPRC
	A-IV墓	大型墓室	4	中年男性	SL-L	完形	セット	MPRC
	A-V墓	大型墓室	3	中年男性?	SL-L	完形	セット	MPRC
	A-VI墓	大型墓室	2	未成年女性	SL-L	完形	セット	MPRC
	B-I墓	大型墓室	4	中年男性	SL-L 2	完形2	セット2	MPRC
	B-II墓	大型墓室	4	特定できず	SL-L	完形	セット	MPRC
	B-III墓	大型墓室	3	特定できず	SL-L	完形	セット	MPRC
	B-IV墓	大型墓室	3	中年男性?	SL-L	完形	セット	MPRC
B-V墓	石列墓	2	成年男性	SL-L	完形	セット	MPRC	
ネバフ	5号墓	石室墓	1	子供			有、完形	LC
パレンケ	A1墓	石室墓	2	特定できず			有	LC
	S5墓	大型墓室	不明	特定できず	不明	不明	無	LC
トニナー	V-2墓	石列墓	1	成年男性	SL-L	完形	セット	LC
アルタル	25号墓	石列墓	1	性別不明の成年	BN	完形	無	LC
セイバル	5号墓	石列墓	1	成年男性			有、破片	MPRC
コパン	T7墓	石室墓	1	性別不明の成年	不明	不明	無	LC-EPOC
エル=ミラドール	3号墓	単純埋葬	1	未成年女性	BN	破片	無	LC
ワシャクトウン	E6墓	石列墓	1	性別不明の若成年	BN	破片	無	EC
ティカル	22号墓	大型墓室	2	成年男性	BN	破片	無	EC
	48号墓	大型墓室	3	成年男性	不明	完形	セット	EC
	16号墓	墓坑	1	老人女性	SL-L?	破片	無	LC
サンタ=リタ	不明	不明	5	詳細不明	BN-D	完形	無	POC
	不明	不明	3	詳細不明			有、不明	POC
セロス	不明	不明	不明	不明	BN	破片	無	LPRC
	不明	不明	不明	不明			有、破片2	LPRC
クエリヨ	23号墓	単純埋葬	1	性別不明の子供	BN 2	破片	無	LPRC
アルトゥン=ハ	4号墓	石列墓	1	老人男性			有、破片	LC
	25号墓	墓坑	1	不明	BN	破片	無	LC
ベイキング=ポット	R1墓	単純埋葬	1	老人男性	BN	完形	セット	EPOC
マウンテン=カウ	7号墓	石室墓	1	不明	不明	不明	無	LC
ジビルチャルトウン	57-1墓	石室墓	1	不明	BN-D 2	完形	無	LC
	38-sub. 7	単純埋葬	不明	性別不明の子供			有	LC-EPOC
マヤパン	2号墓	石列墓	不明	不明			有、完形	LPOC
	14号墓	石列墓	2	老人男性と老人女性	BN	完形	セット	LPOC
	16号墓	石列墓	3	性別不明の成年			有、破片	LPOC
	39号墓	石室墓	2	若い成年男性と女性	BN	完形	無	LPOC
	5号納骨室	石列墓	無	無			有、完形	LPOC
	15号納骨室	石室墓	無	無	BN	破片	無	LPOC
				無	BN-D	破片	無	
18号納骨室	石列墓	無	無	BN	完形	有、完形4	LPOC	

時期に用いる略号

前期...E

中期...M

後期...L

先古典期...PRC

古典期...C

後古典期...POC

次に、完形の製粉具が副葬された理由も考えてみたい。ただし今回の資料を見ると、完形の製粉具が副葬例を全て同一の理由で説明しにくい面がある。というのは、わざわざ副葬するために製粉具を製作したと考えられる資料があるのである。

サクレウでは、SL-LS、BN-Lといった足付きメタテの他に、EFメタテをはじめとする装飾されたメタテも副葬されていた。SL-LSやEFメタテは、使用痕が報告されていない上に、いわゆる製粉面の斜度が急すぎて実用的ではなく、トウモロコシなどをすり潰す日常の調理用具とは考えられない。さらにEFメタテについては、動物の頭部などが装飾が施されており、鑑賞用であった可能性が高い。より装飾性の強いメタテがコスタリカのニコヤで大量に報告されており [Ryder 1983]、中央アメリカからマヤ高地にこの文化が北上してきたと思われる。このように、美的外観からメタテを奉納物の一つとして捉えた面も考えられよう。

またカミナルフユでも、SL-L、SL-LSといった足付きメタテが出土している。しかもこれらは、日常で使われていたメタテと比べて小さめの大きさで、良好に仕上げられている。使用面はすり減っている資料もあるが、極端にくぼんでいるものはない。したがって副葬前に使用されても、極端に使い古したものではない。このことと完形品が多いことも考え合わせれば、サクレウのように最初から副葬するためにメタテを製作したとは言えないまでも、副葬する以前から製粉具を特別な用具として意識していた可能性はあろう。

しかしそれ以外の完形の製粉具は、元々副葬を意識せずに、結果的として副葬することになったと考えるのが自然である。トニナーのV-2墓とティカルの16号墓を除き、全ての副葬品は足のついていないBNやBN-Dメタテである。これらは一般的に日常の製粉具として知られる形態のメタテである。しかも、かなり長期にわたる使用痕が認められ、最初から副葬に利用しようと考えていたのではなく、調理用具として使用した後に副葬したものと推測できる。生前被葬者が使っていたものを、そのまま墓に納めたと考えるのが妥当であろう。特にサンタ=リタ、ジビルチャルトウン、マヤパンでは、BN-Dメタテが副葬されており、被葬者が生前よく利用していたものをそのまま副葬した可能性が高い。後古典期のユカタン半島では、被葬者が生前使用していたものを副葬する習慣があったと報告されている [Tozzer 1941: 130] ことも、これを裏づける要素である。つまり、製粉具の副葬を日常生活の延長と捉えることができよう。

5. 被葬者や墓の型式から見た製粉具の性格

5-1. 規模の大きい墓・副葬品が豊富な墓

まず、社会的地位が高かったと考えられる被葬者について、墓資料を整理する。生贄として埋葬された可能性がある大型墓室は、サクレウの建造物1墓室、カミナルフユのA-I・A-II以外の大型墓室、ティカルの48号墓である。これらを含めた大型墓室は副葬品が非常に豊富で、しかも翡翠や貝殻、精製土器などの貴重品が多いため、墓の構造からも埋葬主体となっている被葬者は社会的地位が高かったことは間違いない。埋葬された人物は生贄を含めて複数のため、どの副葬品が誰のものか特定できないものもあるが、副葬位置から製粉具を副葬した対象者が特定できる例を、以下で取りあげたい。

サクレウについて、建造物1の大型墓室では、性別不明の成年と性別・年齢とも不明の人物の2体が埋葬主体であり⁴⁾、他の被葬者5体は生贄として納められた可能性がある。メタテとマノの3

セットのうちSL-LSメタテ1セットは、その配置から生贄と考えられる若い成年女性に副葬されたと思われる。他の2セットの製粉具は、どの被葬者に対するものか特定できない。また大型墓室ではないが、石室墓12-1には3体の被葬者が認められ、副葬品の有無から上に納められた成年女性が埋葬主体で、下の成年女性と上の未成年女性が生贄として捧げられた可能性があろう。EFメタテとマノのセットは、この墓の埋葬主体である成年女性に副葬されたと考えてよい。石室墓37-3に埋葬されていた男女は夫婦とも考えられるが、若い成年女性は妾であったと推測されている [Woodbury and Trik 1953: 80]。いずれにしても、墓37-3のEFメタテとマノのセットは若い成年女性に副葬されたと考えられる。以上の事例から、サクレウでは製粉具が女性に対しての副葬品であった可能性が高い。ウッドブリーらによれば、メタテやマノが日常的に食事を作るために女性によって頻繁に使われていたことは、多くの民族例からも論じられているため、製粉具は女性に副葬されていたと推測している [Ibid.: 222]。さらにカミナルフユなど他の遺跡でも、「メタテやマノ=女性に伴う副葬品」があてはまると述べている。

しかし同じ大型墓室でも、カミナルフユの製粉具の副葬の意味はサクレウの場合とは異なっていると思われる。製粉具の副葬対象となる人物が特定できるのは、A-I墓、A-IV墓、A-V墓、A-VI墓、B-I墓、B-IV墓の計6基の墓であるが、うち4基の墓では男性に製粉具が副葬されているからである。A-IV墓には埋葬主体である中年男性、子供、未成年者2体が埋葬されているが、メタテとマノのセットは中年男性に副葬されたものと考えられ、他の3体は生贄となった可能性が高い。同様に、A-V墓、B-I墓、B-IV墓でも埋葬主体である中年男性にメタテとマノのセットが副葬されたと推測できる。唯一A-VI墓では、男性の生贄として埋葬された可能性のある未成年女性に対してメタテとマノのセットが副葬されているが、カミナルフユの大型墓室では、社会的地位が高い埋葬主体にメタテやマノが副葬された例が多い。ウッドブリーらは、カミナルフユでもサクレウ同様に、メタテやマノが女性のための副葬品である可能性を示唆しているが [Ibid.: 222]、彼らの説は性別不明の未成年者が女性であることを前提としており、問題があると言わざるを得ない。

ティカルの48号墓の被葬者は3体あり、1体は成年男性、残り2体はいずれも生贄と思われる性別不明の未成年である。副葬品は豊富で100以上の翡翠製のビーズなど豪華な副葬品が目立つ。埋葬主体である成年男性は第11代王の「嵐の空 (Stormy Sky)」であり、頭は戦争により失ったと推測されている [Coe 1990: 123]。メタテとマノのセットも、この王への副葬品と解釈できる。

以上のように、大型墓室にはメタテとマノが完形で副葬されている例が多い。大型墓室の被葬者は、埋葬規模から、それぞれの地域で食糧（主食であるトウモロコシなど）の生産・流通を管理していたことが考えられる。そのことがさらに社会的信頼性を産み出し、メタテやマノを食糧の象徴として副葬する儀式や儀礼があった可能性があろう。このような状況は、破片が副葬されていた他の型式の墓で出土した製粉具と同列には考えられない。

なお、カミナルフユのA-I墓とA-II墓は、出土状況からいずれも追葬されたと考えられている [Kidder et al. 1946: 90]。もしそうだとすれば、A-I墓の子供は上にある2体より前に埋葬されたことになる。よって子供は何らかの病気で亡くなった可能性が高く、メタテは子供が来世に行っても食糧に困らないように副葬されたと考えられる。

5-2. 中規模の墓

次に副葬品の極端に多くない中規模の墓、すなわち石室墓と石列墓を中心に考える。

集団墓なのは、サクレウの墓9-1と墓11-1、カミナルフユのB-V墓、パレンケのA1墓、マヤパンの14号墓、16号墓、39号墓である。ただし、サクレウとパレンケの墓は、製粉具の副葬対象が明確ではない。カミナルフユのB-V墓は、副葬品が28点認められ、被葬者が成年男性であることから、この男性が埋葬主体で未成年の人物は生贄として埋葬されたと考えるのが妥当であろう。他の遺跡における同じ規模の墓と比べると、中規模の墓にしては副葬品は豊富だが、カミナルフユの大型墓室とは墓の構造や副葬品の数・内容から判断して一線を画する必要がある。

マヤパンでは、14号墓、16号墓、39号墓に製粉具が副葬されている。16号墓は遺存が悪いため被葬者の性別は特定できず、しかもマノの破片が副葬されている。一方、14号墓と39号墓の被葬者は、いずれも男性と女性のペアである。14号墓では老人夫婦と考えられるペアに対してメタテとマノのセットが、39号墓では若い成年夫婦と考えられるペアに対して完形のメタテが、それぞれ副葬されている。前述のように、後古典期のユカタン半島で被葬者が生前使用していたものを副葬する習慣があった [Tozzer 1941: 130] ならば、女性が使用していた製粉具を墓に納めたことになる。製粉具以外の副葬品も豊富とは言えないことから、社会的権威を象徴するものでないことは確かである。なお、マヤパンではメタテやマノが納められている3基の「納骨室」が報告されている。「納骨室」がもし生前に用意されたのなら、生前に個人的にあるいは家族として、死後に埋葬するものを用意していたことになる。それは来世の食糧を象徴する道具か、将来埋葬される予定の人物が農業や調理に深い関わりを持った職業だったか、といった推測ができる。

次に、石室墓や石列墓で被葬者が単数の墓は9基発見されているが、そのうち被葬者の年齢かつ性別が明確なのは、ネバフの5号墓、トニナーのV-2墓、セイバルの5号墓、アルトゥン＝ハの4号墓である。ネバフの5号墓は、被葬者が子供であるにもかかわらず、副葬品に翡翠のビーズやペンダントが含まれるなど、社会的に力を持った家系の子供であることが推測される。副葬されたマノは、玩具として傍らに置いたか、来世においても食糧に不自由しないように願ったのではないだろうか。トニナーのV-2墓とセイバルの5号墓では、成年男性に製粉具が副葬されていた。ただ、トニナーの墓には完形のメタテとマノのセットが副葬されていたのに対し、セイバルの墓にはマノの破片が納められていたという違いがある。アルトゥン＝ハの4号墓にも、やはりマノの破片が副葬されており、これらを一まとめにして考えることはできない。

5-3. その他の小規模な墓・埋葬

墓坑は、ティカルの16号墓、アルトゥン＝ハの25号墓の2基であり、単純埋葬は、エル＝ミラドールの3号墓、クエリヨの23号墓、ベイキング＝ポットのR1墓、そしてジビルチャルトウンの38-sub.7の4基である。構造に違いは認められるが、いずれも副葬品は乏しく、被葬者の社会的地位の高さは窺えない。具体的な副葬品は、ティカルの16号墓にはメタテの破片と土器2点のみ、アルトゥン＝ハの25号墓にはメタテ片、黒曜石製石刃、かたつむりの殻が入った骨壺が2点、エル＝ミラドールの3号墓にはBNメタテの破片が1点と土器5点、クエリヨの23号墓の副葬品には土器片とメタテ2片、ベイキング＝ポットのR1墓にはメタテとマノのセット、そしてジビルチャルトウンの38-sub.7墓にはマノ、土器、翡翠性ビーズが各1点、といった具合である。ベイキング＝ポットのR1墓では、老人男性に完形のメタテとマノがセットで副葬されているが、その他はすべて破片の状態

納められている。なお、クエリョ、ジビルチャルトウン、エル＝ミラドールの墓では、子供に製粉具を副葬している。これらの墓のコンテクストは居住用建造物で、エリート層とは関連が薄い。ただ、特殊な葬送儀礼として製粉具を用いたのか、日常生活の延長線上の文化要素なのか、この資料数では判断できない。

6. 総括と今後の課題

従来の研究では、製粉具に焦点を絞ったものがほぼ皆無であり、本稿では現段階での副葬・埋納された製粉具の事例を整理し、さらに副葬された理由について考えてみた。だが二次資料がほとんどを占めており、考古資料が不十分な現段階ではこの間に対する答えを出すことはできない。ただし可能性としては、①生前の身近な品として被葬者に副葬する慰霊的な意味（女性の場合は生前の道具、庶民の幼児や子供の場合は玩具）、②被葬者が他界した後も食糧に不自由しないように食糧の豊富さを願う来世的な宗教概念、③天候不順や天災による農耕の破綻で食糧不足になった際の現世での豊穡祈願、などが考えられる。そしてこのような精神文化的要素は、それぞれの遺跡や地域で同一ではなく、ある時には単独で、またある時にはいくつかの理由が複合した形だったと思われる。これらは、ある意味で推測にとどまってしまったが、上の仮説を演繹的に証明していくためには、一次資料、出土状況、そして地域・時期ごとの社会状況を総合的に分析する必要があり、本稿がその出発点になると筆者は考えている。

ところで、製粉具の副葬・埋納品以外にも、儀式や儀礼で使われた製粉具として興味深い資料がある。セロスやクエリョでは建造物の土台に埋められた可能性、メタテやマノが奉納された可能性が報告者によって指摘されている [Garber 1989: 22; Hammond et al. 1991: 189]。この説が正しければ、食生活が安定するように願うとか、トウモロコシの神を奉るとか、あるいは建物自体のいわゆる建て前的な行為などが推測できる。ただしいずれの場合も明確な論拠はなく、あくまで報告者の推測によるものだという [Garberによる私信 2000]。やはりこれらについても、さらに出土状況やコンテクストの分析を細かく行う必要がある。

本稿は開地遺跡に絞って分析したが、洞窟遺跡に関しては、ユカタン半島北部のバランカンチェ洞窟で大量のメタテやマノが発見されている [Andrews 1970, 多々良 2000]。また、バランカンチェほどの資料数ではないが、他の多くの洞窟遺跡でもメタテやマノが発見されている。筆者が参加したペリーズ西部洞窟地域研究プロジェクトでは、これまで9ヶ所のうち7ヶ所の洞窟でメタテあるいはマノが確認されている。洞窟は通常の生活の場とは考えにくく、明らかにこれらの資料は儀礼と関連があろう。こういった状況は神話との関連で説明することができよう。例えば『ポボル＝ヴフ』をはじめとするいわゆる「マヤ神話」には、トウモロコシによって人が造られた話があり、彼らマヤ人にとって、トウモロコシ栽培は重要な生業の一つであり、トウモロコシの神を崇めることも日常生活の重要な一要素であったと推測できる。ただし、安易に民族学や文献史料などの周辺分野の援用を求めず、現地での調査を通じて一次資料を収集し、周辺分野と整合性をつけるために中位理論を充実させながら、今後の古代マヤ人の精神文化に関する研究を進めていきたい。

【謝辞】

本稿は、1999年5月15日に開かれた古代アメリカ研究会第4回研究発表会で発表した「製粉具から見た精神文化に関する一試論」のうち、マヤ地域の資料に限定し、その後の新たな知見をもとに

修正・加筆したものである。本稿の執筆にあたり、名古屋大学文学部助手の伊藤伸幸氏、神奈川大学日本常民文化研究所の中村誠一氏、その他多くの方々から有益なご教示を頂いた。末筆ながら感謝申し上げたい。

註

- 1) 報告書で著者が時期名を明示している場合には、その通りの時期名を用いた。
- 2) ここでいうPDとは、Problematical Deposit の略で、墓ともキャッシュとも定義できない遺構を示す [Coe and Haviland 1982: 49]。だが、この種の遺構は意図的に遺されたものであり、本稿ではPDを埋納遺構として扱った。
- 3) マヤパンでは、報告者が「埋葬 (Burial)」と「納骨室 (Burial Vault)」に分類している。後者は「明らかに生前に死後の埋葬を用意した場所だが、結局使用されなかったもの」と定義されている [A.L.Smith 1962: 232]。
- 4) ここでいう年齢幅は一つの目安だが、子供は12歳ごろまで、未成年は18歳ころまで、成年はおよそ約40歳まで（中年は約40歳）、そして40歳以上の年齢を老人としている。

参考文献

- Andrews, E. W., IV
1970 Balankanche, Throne of the Tiger Prince. *Middle American Research Institute, Tulane University*, Pub.32. New Orleans.
- Andrews, E. W., IV and E. W. Andrews, V
1980 Excavations at Dzibilchaltun, Yucatan, Mexico. *Middle American Research Institute, Tulane University*, Pub. 48, New Orleans.
- Becquelin, P. and C. F. Baudez
1979 Tonina, Une Cité Maya du Chiapas. *Etudes Mesoaméricaines*, Vol. VI, Tome I. Mission Archeologique et Ethnologique Française au Mexique. Editions Recherche sur les Civilisations, Paris.
- Blom, F. O. La Frage
1925-27 *Tribes and Temples*. Vols.1 and 2. New Orleans, Tulane University.
- Coe, William R.
1990 Excavations in the Great Plaza, North Terrace and North Acropolis of Tikal. *Tikal Reports No.14. Museum Monograph 61*, The University Museum, University of Pennsylvania.
- Coe, William R. and W. A. Haviland
1982 Introduction to the Archaeology of Tikal, Guatemala. *Tikal Reports No.12. Museum Monograph 46*, The University Museum, University of Pennsylvania.
- Copeland, D. E.
1989 Excavations in the Monos Complex, El Mirador, Péten, Guatemala. *Papers of the New World*

- Archaeological Foundation*, No.61. Brigham Young University, Provo, Utah.
- Garber, J. F.
 1989 *The Ground stone Industry. Archaeology at Cerros, Belize, Central America, Vol. II: The Artifacts.* Southern Methodist University Press, Dallas, Texas.
- Hammond, N. (ed.)
 1991 *Cuello: An Early Maya Community in Belize.* Cambridge University Press, New York.
- Haviland, W. A.
 1985 *Excavations in Small Residential Groups of Tikal: Groups 4F-1 and 4F-2, Tikal Reports No.19, Museum Monograph 58.* The University Museum, University of Pennsylvania.
- Howell, Wayne K.
 1989 *Excavations in the Danta Complex at El Mirador, Péten, Guatemala. Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.60. Brigham Young University, Provo, Utah.
- Jaeger, S. E.
 1988 Appendix II: The Manos and metates of Santa Rita Corozal. *A Postclassic Perspective: Excavations at the Maya Site of Santa Rita Corozal, Belize.* edited by A. F. Chase and D. Z. Chase. Pre-Columbian Art Research Institute, Monograph 4, San Francisco, California.
- Kidder, A. V., J. D. Jennings, and E. M. Shook
 1946 *Excavations at Kaminaljuyu, Guatemala. Carnegie Institution of Washington*, Pub. 561.
- Longyear, J. M. III
 1952 *Copan Ceramics: A Study of Southeastern Maya Pottery.* Carnegie Institution of Washington, Pub. 597.
- 大井 邦明
 1995 「カミナルフユの歴史と文化」『カミナルフユ（1991-94）』 大井邦明監修、たばこと塩の博物館、東京
- 大井 邦明、中森 祥
 1995 「カミナルフユ遺跡モンゴイ地区の埋葬調査」『カミナルフユ（1991-94）』 大井邦明監修、たばこと塩の博物館、東京
- Pendergast, D. M.
 1982 *Excavations at Altun Ha, Belize: 1964-70*, Vol.2. Royal Ontario Museum Publication in Archaeology, Toronto.
 1990 *Excavations at Altun Ha, Belize: 1964-70*, Vol.3. Royal Ontario Museum Publication in Archaeology, Toronto.
- Proskouriakoff, T.
 1962 *The Artifacts of Mayapan. Mayapan, Yucatan, Mexico*, pp.321-442. Carnegie Institution of Washington, Pub. 619, Part 4.
- Ricketson, O. G.
 1931 *Excavations at Baking Pot, British Honduras.* Carnegie Institution of Washington, Pub. 403, Contribution 1.

Ricketson, O. G., Jr. and E. B. Ricketson

1937 *Uaxactun, Guatemala: Group E 1926-1931*. Carnegie Institution of Washington, Pub. 477.

Ruz, Lhuillier Alberto

1962 Exploraciones Arqueológicas en Palenque; 1957. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* Tomo 14, pp.35-90.

Ryder, P. R.

1983 *The Carved Metates of Greater Nicoya*. Thesis of Master of Arts in Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.

桜井 三枝子

1993 「中米グアテマラ南西部高地のマヤ村落におけるコフラディア（信徒集団）に関する一考察 —サンチアゴ・アティトラン村の事例より」 『大阪経大論集』第44巻 第4号 pp.235-294.

Smith, A. Ledyard

1962 *Residential and Associated Structures at Mayapan. Mayapan, Yucatan, Mexico*, pp.165-320. Carnegie Institution of Washington, Pub. 619. Part 3.

1972 Excavations at Altar de Sacrificios. *Papers of the Peabody Museum*, Vol.62, No.2. Harvard University, Cambridge, Massachusetts.

Smith, A. L. and A. V. Kidder

1951 Excavations at Nebaj, Guatemala. *Carnegie Institution of Washington*, Pub. 594.

多々良 穰

1994 「メタテの分類と分布に関する一試論 —マヤ地域を中心に—」 『中南米考古学研究会会誌』第4号、pp.1-27. 中南米考古学研究会、金沢

2000 「バラカンチェ洞窟における儀式について」 『Las Culturas Indígenas』Numero 3, pp. 23-39. Capac ñan、京都

Thompson, J. E. S.

1931 Archaeological Investigations in the southern Cayo District, British Honduras. *Field Museum of Natural History, Anthropological Series*, 17(3), Chicago.

Tourtellot, Gair, III

1990 Excavations at Seibal: Peripheral Survey and Excavations. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* 16, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.

Tozzer, A. Marston (ed.)

1941 Landa's Relación de Las Cosas de Yucatan. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* 16, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.

Welsh, W. B. M.

1988 An Analysis of Classic Lowland Maya Burials. *BAR International Series* 409.

Willey, G. R.

1972 The Artifacts of Altar de Sacrificios. *Papers of the Peabody Museum*, Vol.64, No.1, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.

- 1978 Excavations at Seibal, Department of Peten, Guatemala: Artifacts. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* 14(1), Harvard University, Cambridge, Massachusetts.
- Willey, G. R., W. R. Bullard, Jr., J. B. Glass, and J. C. Gifford
- 1965 Prehistoric Maya Settlements in the Belize Valley. *Papers of the Peabody Museum*, Vol.54, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.
- Woodbury, R. B. and A. S. Trik
- 1953 *The Ruins of Zaculeu, Guatemala*. 2 Vols. The William Bird Press, Richmond, Virginia.